

子どもと民話

散歩がてら、ふらっと書店に入る。職業柄、児童図書コーナーへと、自然と足がすすむ。ああ、また増えた。

立派な表紙、カラフルなさし絵、手にとるとズッシリ重いきらびやかな絵本、いつもながら、裏をみるのがおっくうになる。——高価だからだ。高価すぎるからだ。

棚に本を戻し、ため息を一つ。上の段から下の段へと、視線を下ろしていくと、『〇〇のみんなわ集』、『△△のむかしばなし』など、多くの先生方による、再話された民話が、驚くほど立派な絵本になって並べられている。

いいことだ。確かにいいことだとは思う。私たちの祖先が、伝え残してくれた民話が、伝承されなくなってしまう、忘れられていくことを考えると、ああ、よかつ

山本 恵理子



た。まだ救い主があった」と、ほっとしたりもする。しかし、「むかしむかし……」で始まる昔話——日本の民話は、私たちおとなが、幼いころ、聞いて育ったそれへの、単なる郷愁であって、なくなっていくから、葬り去られてしまうから、あわてて採集に行き、それを絵本にするというのではないと思う。

たしかに、「むかし」を語る、語りばさ、語りじさは、非常に少なくなった。だから、それらを少しでも多く資料集にして残すことは必要だと思う。しかし、多くの児童文学者が、その資料集をもとに再話する↓絵本をつくる↓子どもがみる……といった過程をたどるということは、現在、民話を語り継ぐということ、いや、民話を残

していくということが、それら児童文学者、絵本作家たちに一任、という形になっているということではないだろうか。今日のような、あわただしい日常生活の中では、家族がゆっくり子どもと語り合う場もない。そして、核家族化により、おじいちゃんやおばあちゃんが、孫に“むかし”を語ってやるということもなくなってきた。

子どもたちが、家で“お話”を得るのは、母親の口からでもなく、ましてや父親の口からでもない。活字文化時を代表する“物語絵本”、そして、情報化時代の花形、“テレビ”からである。

私の園の子どもの家庭をみても、ほとんどが共働きで、想像する限りでは、家でゆっくり母親にお話をしてもらうというような子は、全くいない。母親は忙しい。しかし、中には、自分たちの幼いころの追憶―燃えさかるいろりを囲んで聞いたあの“むかし”を聞かせてやりたいと考える人もいる。そして、あの驚くほど高い値段の絵本を買って与えるのである。それが精一杯なのかもしれない。忙しさのあまり、

「絵本でもみてなノ テレビでもみてなノ」母親はこんなふうに子どもと離れ、汗水たらして働いているので

ある。

しかし、考えてみると、私たちが手に入れやすいあの文庫本の数倍も高い値段なのが、今日出版されている絵本なのである。民話の本なのである。少なくとも、私の園の子どもたちにとって、それらは手の届かぬ遠い存在のものであろう。

私は思う。クラスの子どもたちを前にしたとき、一話してあげよう、語ってあげよう、日本人の心を、私たちの祖先の伝え残してくれた生き方、たたかいぬいた勇氣ある話、美しい話を。家庭で作ることのできない場を、この保育の場で。そして、私自身の口からそれらを語り聞かせてあげよう――と。

それには、私たち保育者の民話に向かう態度が問題となるであろう。

『〇〇の民話』、『△△の昔話』などという本を読みあさって頭につめこみ、それらを片っ端から話してやる……というのではいけない。民話一つ一つを、私たちはどうとらえたいかもう一度考え直す必要がある。

当時、人々は、どんな生活をし、どんな苦しみの中から、どうやって立ち上がったのか、それらを語り伝え

てきた民衆の心をつかみ、日本文化の特質を見いだすことが大切なのではないだろうか。それは、歴史を学ぶ態度につながるであろう。私たちが、歴史を学ぶということは、歴史そのものを、単に一つの教科として片づけるのではなく、日本人の祖先が、どう考え、どう行動し、それによって時代がどう変化していったか、あんなやり方をする、あんな失敗があり、こんなやり方をする、こんな事態を引き起こすぞ、というふうに、私たちがこれから生きていく上での、大きな教訓となっているのではないだろうか。新しいものを、新しい文化をつくり出すには、古いもの、古い文化を深くみつめ直す必要があり、古いものを考察していく中でこそ、新文化を創造する上での大きなヒントを得られるのだと思う。

ところで、私たちが、「民話」を考えると、すぐに「むかし……」で始まるもの、古い話だけがそれだと考えがちであるが、民衆の目でもとらえたいろいろな話——つまり「民話」は、現在でも数多くある。

「公害に苦しむ四日市や水俣住民たちのたたかい」これも民話の一つであろう。公害列島日本にどうしてなったのか、それに対して人々はどうかたたかったのか、これ

も歴史の一コマである。その他、第二次大戦、原爆、など、私たち日本人のたどってきた道、日本人の歴史、その中でも忘れてならないもの、二度と繰り返してはならないことを、日本人一人一人が後世に語り継がなければいけないと思うのである。

先日、私の知っているある小学校の先生が子どもの両親に、戦争体験を書いてもらい、それを文集にされた。その時、父さん、母さんの口から始めて戦争体験を聞き、自分たちの父母が実際に味わった「戦争」というものの恐ろしさを知り、子どもたちは、非常に驚いたという。

今が、遠い昔になったとき、これら「公害とのたたかい」や、「戦争体験」は、民話として残されていなければならない。語り継がれていなければならない。「現代の民話」はどこにでもある。母親や父親、そして保育者、教育者たちが、日常生活の中でとらえた「心に残る話」「伝えてあげたい美しい話」……それら現代の民話を暇をみつけて、子どもたちに語ってあげたいものである。私たち自身の口から……。

最近、あちこちで、「ディスカバー・ジャパン」という国鉄のポスターがみられる。それにつられてか、日本中は、

